

全国大会佐賀大会レポート

執行部

監事 後藤亮太

佐賀の地に降り立った瞬間、秋の空は高く澄み、風には麦の穂を撫でるような優しさがあつた。駅前の佇まいは静謐でありながらも、人々の息づかいが確かに感じられる。古きと新しきが手を取り合う街、そんな印象が胸に残った。まるで時が一度呼吸を止め、我々を迎え入れるかのようであつた。開会式には参加できなかったが、卒業式の幕が上がるや、壇上には志を胸に秘めた青年たちが登壇していく。その姿は、まるで古の武士が戦に臨む直前の緊張を孕んでいるかのようだった。運営は周到に整えられ、滞りなく進行していく。だが、整然としたその背後には、幾人もの汗と努力が積み重ねられていることを、私は見逃さなかった。

印象深い出来事として、地域の住人が大会周辺の行事に参加していたことだ。純粋な瞳が、あかりの灯る熱気球を眺めながら目を輝かせている。その瞬間、青年会議所活動の原点を静かに照らした。青年会議所とは？と自問自答を繰り返す中で、私の胸にいつしか温かな灯がともっていた。この大会を通じて、私は「地域の心と人の心」というものの重さを学んだ。理念や計画も大切だが、根底にあるのは人と人との信頼である。佐賀という土地の人々の誠実さ、そして卒業生という特別な存在で青年会議所という器の中で育まれる絆。それはまるで、静かな川底で光る砂金のように、見えにくくとも確かに存在する輝きであつた。一方で、参加者の動線や案内表示にはいくばくかの混乱も見られた。会場間の移動に手間取る姿も多く、より一層の配慮が望まれる。しかし、それもまた「現場の生きた学び」であり、次なる大会の礎となるであろう。

佐賀の空の下で感じたのは、希望という名の静かな炎である。派手さはなくとも、確かに燃え続ける志。それが青年会議所という共同体を支えているのだと痛感した。帰路につく列車の窓から、高速で流れる景色を眺めたとき、私はひとつの確信を得た。人は、志を共にする仲間と出会うことで、未来を描く勇気を得るのだと。そして、少しでも早くメンバーが自分と同じ感覚になれるよう最後まで伝えていこうと思った。

